

最新事情

体育やスポーツを通して、
豊かな人間性を育む

東京女子体育大学

(東京都国立市)

大学というと一般に総合大学をイメージしがちだが、音楽や美術、体育などの専門大学も少なくない。今回は、そのうちの1校、体育・スポーツの教育研究を専門とする東京女子体育大学を訪ねた。同大学では、以前から秘書検定講座を開設している。また、本年度からキャリア教育を正課に導入。それらの教育を通じて、同大学ではどのような人材育成を目指しているのだろうか。



国立市の住宅街の一角にある
キャンパスと
陸上競技場(右)



建学の祖、藤村トヨ女史の言葉を刻んだ碑
「腰伸ばせ 即腹の力」



理想を掲げ、不屈の信念で 女子体育の道を切り開く

東京女子体育大学は、日本初の女子体育教師養成学校として明治35年に創設された。以来、1世紀余り。現在もその伝統を受け継ぎ、学生の多くは中学校や高等学校の保健体育教員を志望している。同大学は体育学部体育学科のみの単科大学であり、併設校の東京女子体育短期大

学(保健体育学科、児童教育学科の2学科)と併せ、学生数は約1660人。国立市にあるキャンパスでは、大学生・短大生が共に学んでいる。

キャンパスには専門競技用のコートなどを有する七つの体育館があり、屋外には公式大会で使用できる公認の陸上競技場、ソフトボール場など、体育大学にふさわしい運動施設が充実している。行き交う学生たちは、就活中のスーツ姿も混じるものの、ほとんどが素顔にトレーニングウェアといった活動的なスタイルだ。一般の女子大学とはひと味違った質実な気風を感じさせる。

加茂佳子学長も同大出身。現役時代は新体操のトップクラスの選手として活躍し、指導者に転じてからは多くの選手を育ててきた。加茂学長は同大の気風についてこう話す。

「女性が体育やスポーツをすること自体が非常識とされた時代に、本学の実質的創設者である藤村トヨ先生は、『心身ともに健康で、質素で誠実、礼儀正しい女子体育指導者の育成』という目標を掲げ、強い信念と不屈の闘志で、女子体育教師育成の道を切り開いてきたのです。私が大学に入学したときには、藤村先生はすでに亡くなっていましたが、藤村先生の薫陶を受けた先生方から、その精神をあらゆる場面で刻み込まれた感があります。それを一言で表せば、『言葉ではなく、背中ですす』というのでしょうか。先生方の日常の行動全てがお手本で



キャリア支援部キャリア支援課のメンバー。
(前列右) 一課長



加茂佳子理事長・学長

した。人間として、競技者として、また指導者として、どう振る舞い、どう行動すればよいのか、それを自ら示してくれるのが先生方でした。そうした先生方の背中を見ながら、自分のあるべき姿を学び取っていったように思います。運動技能の習得や向上は、毎日毎日の修練のたまもの。言葉よりも実践です。だから時代が変わっても、建学の精神は今でも私たちの心のよりどころとなっているのです」。

もう一つ、同大には掛け替えのないものがある。卒業生をつなぐ強い絆だ。

「私どもは小規模な学校ですが、卒業生の愛校心の強さではどこにも引けを取らないと思います。みんな母校が大好きなのです。私も大好きですし、こうやって学長として母校のお役に立てることをとても誇らしく思っています。卒業

生は皆さん、多かれ少なかれそうした気持ちを持っていてのではないのでしょうか。全国全県に卒業生の会があり、何かと母校を応援し、支えてくれます。私も昨年は、学生募集のために全国32県を回りました。これも卒業生の会の尽力があつてのことです」と加茂学長。

母娘二代、中には孫娘まで三代そろって同大出身というケースも珍しくないそうだ。体育・スポーツの世界は、加茂学長が言うように、言葉によるごまかしは利かない。自ら体を動かし、地道に修練を重ね、体得していくしかない。大学時代のそうした経験は得がたいものとして、卒業した後も、長く深く心にとどまっていられるかもしれない。

就活への取り組みの二歩は 返事美人になること

スポーツ技能を幅広く習得する体育実技の授業、さらには新体操やハンドボール、カヌーなど強豪ぞろいの体育部の部活で鍛えられ、体を動かすことに明け暮れていた学生たちも、就活が迫ってくるころには一般大学の学生と同じように、気持ちの切り替えが必要になってくる。同大では、中学や高校の教員を目指す学生が大きな割合を占めるが、スポーツ施設や一般企業などを希望する学生も少なくない。スポーツウェアからスーツに着替え、慣れないパンプスも履かなくてはならない。そんな学生たちを支援するのがキャリア支援部である。

キャンパスのほぼ中央に位置するキャリア支援部は、表から中の様子が見えるガラス張りのオープンなしつらえになっている。カウンターの前のゆったりしたスペースには、カラフルなソファやウッドベンチが配され、誰でも気軽に出入りできる開放的な雰囲気がある。

キャリア支援部のスタッフは6人。センターのカウンターには、入れ代わり立ち代わり学生がやってくる。格別用事があるわけでもないらしく、スタッフとちよつと言葉を交わしては立ち去っていく学生も多い。学校の中のオアシスといった趣である。スタッフと学生との距離はすこぶる近いようだ。キャリア支援部キャリア支援課の一家元美課長はこう話す。

「体育系の学生は総じて明るく元気。体を動かし汗を流しているからか、屈託がなくすがすがしさがあります。でも学生には、社会に出たらそれだけではダメだと言っています。大人としての態度、振る舞いをきちんと身に付けないとただの明るい人としか見られませんよ。いつも言うのは『はいっ』と返事ができる。返事美人になること。こういうことは繰り返し言わないと身に付かないので、『分かった?』『返事は?』と口を酸っぱくして言うことにしています。カウンターの前に学生が立ってれば、『何かご用ですか? 資料を見たい? だったら、資料を見せてください、ですね』。学生たちは部活動の中で上下、左右の人間関係についておのずと学んでいますので、気持ちとしては

最新事情 24.....東京女子体育大学

3級・2級を取得した
植木なつ乃さん



ワークやディスカッションを取り入れた
「秘書検定講座(2・3級)」。
本年度からはキャリア教育の一環として
正課となった



できています。だから言えば分かるし、教えれば素直に受け入れてくれます。教えがいのある学生ばかりです。

一家課長も同大の卒業生だ。高校・短大の体育教師を務めた後、教員としての経験を生かし現在の職に就いた。親身に後輩を思いやる言葉だからこそ、学生たちが何かにつけて相談に訪れるのだろう。

秘書検定講座にも、
スポーツ感覚を取り入れる工夫を

就活に向けて気持ちを切り替えること。一家課長はそれを「スイッチ・オン」と称し、学生たちとの合い言葉にしている。「スイッチ・

オンにしてる?」「スイッチ・オンにしてね」といった具合だ。その仕掛けの一つとして、学生に受講を勧めているのが「秘書検定講座(2・3級)」だ。春秋の検定試験前の土曜午後に4時間ずつ、計5回のコースを実施している。

「検定名が秘書となっているので、デスクワークに就かないから自分には関係ないと思っている学生もいます。でも、秘書検定で学ぶことはどんな仕事に就いても役立つ内容です。中でも常識マナーは、よい人間関係を築くために知っておきたいことばかり。内容を説明して『勉強しておけば生涯役に立つわよ』と積極的に勧めています」(一家課長)。

では実際にどのような授業が行われているのか。「秘書検定講座」をのぞいてみた。

1クラス30人程度で、2クラス編成である。午前中は、健康スポーツ関連のインストラクター資格取得のためのプログラムが組み立てられ、それを終えてから駆け付ける学生も多く、トレーニングウェア姿が目立つ。検定講座は休憩を挟むものの4時間という長丁場である。いかにして学生の集中力を保つか。講師を務める早稲田ワークキングスタールの保坂美鶴子先生は、さまざまな工夫を凝らしている。

「体育会系の学生さんですから、本来は体を動かす授業の方が得意分野だと思います。この講座は筆記対策ですから、働かせるのはどうしても頭だけに偏りがち。でも、そればかりだと眠くなったり、集中力も続きません。そこで、ペ

アあるいは数人のグループワークやディスカッションを取り入れたり、学生に発言、発表させたり、ポイントとなる箇所を全員で読み上げたり、授業に動きを持たせるように工夫しています。宿題や授業ごとの課題などもほぼ全員がやってきます。皆さん、とても真面目という印象ですね」(保坂先生)。

同講座を受講し、2・3級を取得した4年生の植木なつ乃さんは、保健体育の教員を志望している。講座の感想をこう話す。

「実家がお寺で檀家の方々が出入りしていたこともあり、小さいころから言葉遣いには気を付けていました。でも親のまねをして話していただけなので、敬語の使い方などが曖昧でした。マナーや礼儀についても一度きちんと学びたいと思っていました。もともと興味もあつたので、こういう場合はどうしたらよいだろうか」と疑問が湧いて、講師の先生には随分いろいろなことを質問しましたが、その都度丁寧に分かりやすく答えてくださいました。私は保健体育の教員志望ですが、生徒に対してフレンドリーに接しても、言葉遣いや態度は丁寧さを崩さないようにしたいと思っています。高校時代に憧れた陸上部の顧問がそんなタイプの先生だったのです。節度のある、すごくすてきな先生でした。私も、そうなりたいです」。

ちなみに顧問の先生も同大出身者だったそう。言葉ではなく、背中を示す、という姿勢は、ここにも生きているようだ。